一〇世紀の和歌史における物語和歌

高橋　秀子

本論文は、日本の一〇世紀に成立した物語の和歌を和歌史の中に位置付け、和歌史の要素として示すことを目的とする。

一〇世紀は、和歌史において重要な時代である。なぜなら、和歌に様々な動きが生じたからだ。その動きとは、和歌が幅広い身分にわたって詠まれるようになったこと、日常生活でも多く詠まれ、それに伴って贈答歌が重視されると同時に盛んに詠み交わされるようになったこと、定数歌が生じたこと、歌合や歌会が多く催されるようになったことなどである。このような中で数多く作られた物語にも、和歌は用いられている。

一〇世紀に成立した物語の和歌については、数多く考察が為されてきた。それらにおいては、各物語世界を作り上げるための和歌の機能を見出すという観点が主流であり、その和歌を同時代の和歌の一部として捉えるという観点は乏しい。物語の和歌について現実世界の和歌との関連を意識した観点が確立しているのは、物語の成立時代順に沿って言うならば、一一世紀初頭に成った『源氏物語』が初めてである。また、従来、一〇世紀の和歌史は、歌人の歌風や当時編まれた勅撰集の特徴といった、現実世界の和歌に見られる動きを軸にして捉えられてきた。当時成立した物語の和歌は、和歌史から外されていると言える状況である。物語は、虚構の世界を内包してそれを読者に向けて示すものである。そこに用いられている和歌は、現実世界の和歌と通じる性質や表現を持つ一方で、物語世界のありように沿った特殊な性質や表現も持っている。このような物語の和歌に注目することで、当時の和歌の用いられ方をより実態に即して捉えられるはずである。

そこで本論文では、一〇世紀に成立した物語の和歌を、個別の物語の枠を越えて、同時代の和歌全体と結び付けて捉える。

本論部は三つの章から成る。第一章では『うつほ物語』を取り上げて、新しい和歌表現の開拓と物語におけるその展開に注目する。当時、定数歌を作り始めた初期定数歌歌人や彼らと交流していた河原院周辺歌人は、新しい和歌表現を開拓した。『うつほ物語』の和歌にはそれらが多く見られる。このことは先行研究でも注目されてきたが、その研究は、表現が共通しているということの指摘に留まりがちである。本論文では、両者に表現が共通していることの和歌史的意味を考えている。また、「三条左大臣殿前栽歌合」において定型化した和歌表現に着目し、これが『うつほ物語』の和歌に見られることも指摘している。これらの考察を通して、当時、開拓された和歌表現が作品の種類を横断して和歌に取り込まれていたこと、そこには、当時の人々の、和歌によって表そうとするものへの意識がうかがえることを明らかにし、物語の和歌が現実世界の和歌と大いに連動していることを証明する。そして、物語、歌集、歌合といった、和歌を有する様々な種類の作品を横断的に扱って和歌を分析する方法が、和歌史を捉えるうえで有効なものであることを示す。

第二章では『竹取物語』『落窪物語』を取り上げて、物語の登場人物と贈答歌の関わりについて述べる。どちらの物語の贈答歌も従来研究対象とされてきたが、その研究は、贈答歌を詠み合う者同士の愛情の有無や、物語の主題との関わりに目を向けるものである。本論文では、『竹取物語』のかぐや姫が詠む贈答歌の表現の特異性に着目し、これがかぐや姫の異質な人物像の造型を担っていることを指摘す

る。『落窪物語』については、贈答歌と共にその詠み手の心情の説明が書かれている例に着目する。そして、その説明が、贈答歌に表れる詠み手の思いが真実であることを補強して、贈答歌に関わる人物の心の連帯を表していることを指摘する。同時に、贈答歌が物語の筋書きを明示する役割を与えられていることも指摘する。これらの考察を通して、贈答歌が、物語では単に登場人物の思いの伝達の手段として用いられているのではなく、人物像や人間関係を客観的に表す手段としても用いられているということを明らかにする。

第三章では再び『うつほ物語』を取り上げて、物語の構造と和歌の関わりについて述べる。『うつほ物語』は長編物語であるが、その末尾に近い巻には、物語内の過去の事柄を現在に結び付ける和歌が並んでいる唱和歌群がある。これについて、物語内の時間の流れを可視化して物語を整った長編物語として見せる機能を見出せることを指摘する。また、最終巻で俊蔭女が詠む歌の内容と表現を分析し、彼女の歌が、長編物語の終結の方向の一つを作り上げていることを指摘する。これらによって、物語の和歌が、それが書かれている場面を越えて、物語内の時間の流れや物語の終結といった、物語世界の枠組みを作る役割を担っているということを明らかにする。

以上のように、三つの観点で一〇世紀の物語の和歌を分析している。物語の和歌は、同時代の和歌に生じた動きを反映しており、物語世界の内容と融合しながら表現としての展開を見せていると言える。また、読者の読解を助ける道具としても、物語世界を作り上げる道具としても、役割も担っていた。一〇世紀において、物語の和歌は、表現形態としての可能性を広げていたのであり、和歌史を構築する不可欠な要素である。

このように、本論文は、物語の和歌を同時代の和歌の一部として捉える観点に基づいた考察を示すことで、物語の和歌を組み込んだ新しい一〇世紀の和歌史の捉え方を提示している。